



令和4（2022）年度 みよし市中学生平和学習広島派遣団 学習成果報告書

令和4（2022）年8月3日（水）・8月4日（木）

目次

———— 第1部 はじめに ————

市長あいさつ	・ ・ ・ ・ ・	P 1
みよし市非核平和都市宣言	・ ・ ・ ・ ・	P 2
事業概要	・ ・ ・ ・ ・	P 3

———— 第2部 事業報告 ————

結団式及び事前説明会	・ ・ ・ ・ ・	P 4
派遣団員名簿	・ ・ ・ ・ ・	P 6
写真による行動の記録	・ ・ ・ ・ ・	P 7 ~ 14
参加者研修報告	・ ・ ・ ・ ・	P 15 ~ 27

第1部 はじめに

市長あいさつ

みよし市は、平成22（2010）年の市制施行を機に、世界平和を願うすべての国の人々と手を携え、戦争の惨禍を二度と繰り返すことのない社会と人類の恒久平和の実現を目指すため、「みよし市平和都市宣言」を制定いたしました。

しかし、世界ではロシアによるウクライナへの軍事侵攻や核兵器使用の威嚇が行われ、日々報道される被害状況を目にすることで、日本に住んでいる私たちも戦争を身近に感じる現状があります。このような状況で、市民の皆様に核兵器のない世界についてより深く考えていただき、核兵器のない世界に一步でも近づくことができるよう、「みよし市平和都市宣言」の趣旨を踏まえ、より強い決意で「みよし市非核平和都市宣言」を行いました。

戦後77年が経過し、戦争を知らない世代が増えている今、私たちが戦争や原爆の体験を次の世代へ語り継ぎ、平和の大切さをどのように伝えていくのか、考えていくかがこの平和を守り維持していくために重要であると考えます。

市内の中学生の皆様を広島に派遣する「みよし市中学生平和学習派遣事業」は、戦争の記憶を風化させないための平和に対する取組の一つとして、平成28

（2016）年度から開始し、新型コロナウイルス感染症の影響もありましたが、本年度は派遣団の生徒たちやご家族のご協力を受けて、無事実施することができました。派遣事業は、生徒たちが被爆地である広島の地に立ち、原爆の被害に関する資料を自分の目で見て、被爆者自身の体験を直接聞くことで、平和の大切さや命の尊さ、家族の絆を考えてもらう大変貴重な機会となっています。

この報告書には、市内4中学校の代表として派遣された12名の生徒たちが、恒久平和の実現に向け、次代を担う若い世代として、これからの将来に向けて取り組んでいかななくてはならないと感じた「平和へのメッセージ」が綴られています。そして、派遣で生徒たちが感じた思いを、より多くの皆様に共有していただくために、この報告書を作成しました。報告書を読んでいただいた皆様の、いま一度平和について考えていただくきっかけになれば幸いです。

結びに、この派遣事業にご協力をいただいた学校関係者をはじめ、多くの皆様にお礼を申し上げ、ごあいさついたします。

令和5（2023）年2月

みよし市長 小山 祐

みよし市非核平和都市宣言

核兵器のない世界と恒久平和は、私たち人類共通の願いです。

わが国は核兵器による攻撃を受けた唯一の国家であり、私たちは、非核三原則を掲げ、核兵器廃絶を全世界に訴え続けていかなければなりません。核兵器の恐ろしさ、戦争の悲惨さ、平和の尊さについて、考え、語り、戦争で犠牲になった方々の想いと共に後世へ引き継いでいくことは私たちの使命です。

戦争から年月が経過し、核兵器と戦争を現実として体験された方が年々減る中、核兵器と戦争の記憶を風化させ、惨禍を二度と繰り返すことがあってはなりません。

みよし市は、日本国憲法に基づいて、世界平和を願うすべての国の人々と手を携え、強い決意で、核兵器のない世界と恒久平和を実現するため「非核平和都市」を宣言します。

令和4（2022）年9月29日

愛知県みよし市

事業概要

1 事業名

令和4（2022）年度みよし市中学生平和学習広島派遣事業

2 目的

- (1) 戦争の惨禍を二度と繰り返すことのない社会と人類の恒久平和の実現を目指す「平和都市」であることを宣言した本市として、「平和に関する事業」に取り組む。
- (2) 中学生が、実際に広島を訪問し、原爆ドーム及び広島平和記念資料館の見学や被爆者による講話を通して、戦争の悲惨さ、平和の意義について考えてもらう機会を提供し、命の大切さや家族との絆等についての認識を高める。

3 内容

- ・原爆ドーム及び広島平和記念資料館の見学
- ・被爆者による被爆体験講話の受講

4 派遣期間

令和4（2022）年8月3日（水）から令和4（2022）年8月4日（木）まで〔1泊2日〕

5 派遣人員

- (1) 団長＝みよし市総務部長
- (2) 生徒＝市内中学生 12名（各中学校3名）
- (3) 引率＝みよし市教育委員会学校教育課主幹1名、総務課主事1名
計15名

第2部 事業報告

結団式及び事前説明会

《日にち》 令和4（2022）年7月16日（土）

《場 所》 市役所3階研修室

1 結団式

- (1) 認定書交付
- (2) あいさつ
- (3) 団長あいさつ及び団員紹介
 - ア 団長あいさつ
 - イ 自己紹介
- (4) 写真撮影

派遣団員に
認定します！



広島派遣に応募した理由、
派遣で学びたいことを自己
紹介とともに発表しました。



2 事前説明会

(1) 事業説明

ア 派遣事業全般について

イ 研修報告について

(2) 質疑応答



3 レクリエーション（名刺交換ゲーム）



名刺を使って
自己紹介！

団員同士の親交
を深めました！



派遣団員名簿

○ 生徒合計 12 名

学校名	団員名	学年
三好中		1
		2
		3
北 中		1
		2
		2
南 中		1
		3
		3
三好丘中		1
		2
		3

○ 団長

所 属	氏 名
総務部長	深 谷 正 浩

○ 引率者 2 名

所 属	氏 名
学校教育課主幹	狩 野 美 和
総務課主事	倉 内 菜 穂

○ 応募者数 (名)

学校名	人 数
三好中	16
北 中	11
南 中	9
三好丘中	16
合 計	52

応募者総数 / 派遣者数 = 52 / 12 (約 4.3 倍)

写真による行動の記録

<出発式>

広島に向けて出発する前に、派遣中は自分が学びたいことをしっかり考えて行動し有意義な派遣にすること、派遣団としてみよし市の中学生の代表である自覚をもって行動することを確認しました。また、熱中症や感染症への対策など、健康面に関する注意も行いました。



決意表明！

熱中症には気を
付けましょう！



いざ、広島へ！

<宮島>

広島に到着後、派遣団員の親睦を深めるため、フェリーで宮島に渡り、厳島神社を参拝しました。案内の方の説明を聞き、文化遺産に触れることで、歴史・文化を大切にする気持ちを高めました。宮島のシンボルである大鳥居は改修中でしたが、その光景も、歴史・文化を守る大切さを感じることができた貴重な経験でした。また、厳島神社の天神社には、学問の神様である菅原道真が祀られているため、冬に受験を控えた3年生を中心に、手を合わせました。



<グループワーク>

『現在の平和を維持する（恒久平和）ために、核兵器をなくすために、自分たちにできることは何か』をテーマにグループに分かれて話し合いを行い、発表しました。

核兵器の廃絶から人と人との関わりについてまで、意見は様々でしたが、自分と違う考えを持つ仲間と同じ課題に取り組み、新たな視点で平和について考えることができました。



<原爆ドーム>

被爆体験講話を受講するため、平和記念公園内を通り、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館に向かいました。その途中で見た原爆ドームの姿に、戦争の悲惨さ、原爆の被害の大きさ、その後の広島の復興について考えさせられました。



＜被爆体験講話＞

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館で、派遣団員と同じ中学生のときに被爆された山本定男さんから、当時の状況を示す資料とともにお話を伺いました。山本さん自身やご家族、ご友人に起きたこと、広島への被害の状況、終戦後も残る健康面等への不安など、様々なお話を聞き、平和の大切さ、戦争と核兵器の怖さについて、より深く考える機会となりました。



山本さん自身の
経験を基に戦争の
悲惨さなどをお話し
いただきました。

山本さんの話を
真剣に聞きました。



< 広島平和記念資料館 >

山本さんのお話を聞いた後、広島平和記念資料館を見学しました。原爆の被害を受けた人々の写真や遺品などの展示物や当時の記録を目にすることで、原爆がもたらす被害の大きさや、原爆は、戦争後もずっと人々を苦しめるものであることを感じ、家族や友人と過ごすことができる現在の平和がいかに大切なものかを考えることができました。



<帰着式>

2日間の広島派遣で感じたこと、今ある平和な生活が今後も続くために自分たちにできることを代表生徒2名が報告しました。今回の派遣で知った戦争や原爆のこと、直接聞くことができた被爆者の方の思い、この派遣を通して自身で感じた平和の大切さを、派遣団員のみなさんがご家族やご友人、周りの人々に伝えることで、今ある「平和」が繋がっていくことを願います。



＜非核平和都市宣言記念 被爆体験伝承講話会＞

令和4（2022）年9月に行った「みよし市非核平和都市宣言」を記念して、10月30日（日）に「みよし市非核平和都市宣言記念 被爆体験伝承講話会」を開催しました。

式典では、派遣団員による宣言の唱和、派遣団員2名の派遣報告、広島市からお招きした被爆体験伝承者の講話を行いました。



派遣団員研修報告



今回、広島へ行った理由は、2つあって、1つ目は、広島で落ちた原子爆弾や原爆ドームを見て、戦争の悲惨さを自分の目で見て感じたいと思ったからです。

2つ目は、8月6日は、原爆が落ちた日でもあり、僕が生まれた日でもあるので、その日に一体何があったのかを自分で確かめたかったからです。

原爆ドームを見て、いつも見ている写真よりも思ったより小さく見えて、こわれているのが分かりました。原爆ドームは、真上辺りで原爆が爆発したので、ドーム型の鉄骨がそのまま残って、外壁部分が溶けて1つの部屋が崩れてそのままになっていました。他の木造の建物は全部壊れてしまったようです。それを見てそれだけのい力の爆弾だったんだな…と思いました。

そして、広島平和資料館では、一番最初からくり時計のようなものを見ました。それは、広島に原爆が落ちてからの日数でした。その後、中に入って色々な資料を見ました。その資料の中には、1200℃以上の高温でしか溶けないガラスビンが溶けて、変形したものがありました。他にも黒い雨をあびて、赤い発しんができて亡くなった方の写真もありました。赤い発しんは、放射線を浴びて発生するものだそうです。この赤い発しんは、どこにでもありました。

またその他にも、原爆の攻撃を受けて亡くなった兵隊さんの帽子や服、カバンなども展示されていました。そして、原爆の爆発後に、影が焼きついた壁や、当時の状態が描かれている絵画も展示されていました。僕はこれらを見て、想像以上に核兵器はおそろしいなと思いました。核兵器、核爆弾は、人や建物にたくさんの被害が出るものです。今後は核実験や核兵器がなくなって欲しいと思いました。そして、このことをみんなに広めたいです。

次に、平和祈念館では、実際に被爆を体験した山本定男さんのお話を聞きました。原爆が落ちた時に、橋はこわれ、病院は、あとかたもなく消えて、ビルや一部の建物などは鉄骨がまる見えな状態になってしまっていました。そして、その後に降った黒い雨は地図を見ると、黒い靴のような形の区域に降ったそうです。この黒い雨は、人間に害がでる放射線を含んでいる雨です。そして、川沿いには、顔や体がばんばんにふくらんでいる兵隊さんが亡くなった状態で10人以上並んでいたそうです。幸い、山本定男さんの家族は、全員無事だったそうです。

僕は、これから世界から核兵器がなくなりロシアやウクライナのような戦争がなくなって欲しいなと思います。そのために、少しずつでもいいから、支援活動をして欲しいです。

広島派遣団に参加して感じた平和への思い 三好中学校 2年

僕の曾祖父は戦争で亡くなっています。毎年小嶋家のお墓参りは2カ所に行きます。小嶋家の先祖のお墓と戦争で亡くなった曾祖父のお墓です。お寺の境内の中に戦没者だけのお墓があります。今まで、何となくしていたお墓参りですが、今年は僕にとって特別なお墓参りになりました。

祖父は幼い時に戦争で父親を亡くして、父親の愛情を知らずに育ったことで、僕の父を育てる時に、接し方がわからず、悩むことがあったと聞きました。僕は、戦争の悪い影響は、ずっと残ってしまうのだと感じました。今、世界では戦争が起きていて、たくさんの方が亡くなっていることや、小さな子どもたちが親と引き離されていることをニュースで見ます。あの頃の日本と同じです。戦争の無い世の中を作るには、戦争を知らないといけないと思い、参加した今回の広島派遣でした。

広島出発前に、原爆について調べました。1945年8月6日。太平洋戦争のさなかに、広島に原爆が投下されました。原爆の威力は、中心の温度が4000度近くにもなり、半径2kmが一瞬で焼け野原になってしまうほどだったそうです。死者は約14万人。みよし市の人口の倍以上です。8月15日に日本は終戦をむかえましたが、戦争が終わってからも、被爆した人たちの後遺症は未だに続いています。目の病気や白血病、がんなどの大きな病気の原因にもなっているそうです。もう77年も経っているのにです。僕は、現実を知れば知るほど、本当に日本でこんな残酷な事がおきていたのかと驚きました。しかし、実際の広島での体験は、僕の想像以上でした。

テレビでよく見た原爆ドームの実物は、強烈な印象を僕に与えました。原爆ドームのその姿は、当時の爆撃の様子、大きさ、恐ろしさを、僕たちに語りかけているようでした。被爆者の山本定男さん(被爆当時中学二年生)のお話は、今の僕たちと同じ年齢の時のこととは思えない衝撃を感じました。山本さんの言葉からは、戦争の悲惨さがリアルに伝わってきました。そして、広島平和記念資料館での展示物は、目を覆いたくなるものばかりでした。被爆した人の洋服、身に着けていたもの、焼け焦げた三輪車などの実物の展示もありました。これらの展示物には寄贈した人たちの強いメッセージが込められていました。

「こんな思いを他の誰にもさせてはならない。世界の人々に核兵器の恐怖や非人道性を伝え、ノーモアヒロシマと訴えます。」広島の人たちの伝えたい、伝えなければならないという強い思いを感じました。

77年前、日本に原爆が投下されてから、核兵器は使われていません。しかし、大量の核兵器は世界中に存在していると言われていています。そして、世界中で紛争は続いています。いつその核兵器が使われるかわからない、あの日の日本と同じ事が世界のどこかで、いつ起こっても不思議ではないのです。日本は、世界唯一の被爆国としての役割があると広島の人たちは言っていました。それは、もう二度と同じ過ちを繰り返さないようにすること。『ノーモアヒロシマ』という、広島の人たちの声が世界中の人たちに伝われば、きっと今の日本と同じように、平和な世の中になると思います。

僕は、この広島平和学習を終えて、改めて自分にできることは何かを考えました。被爆体験を話してくれた山本さんの言葉を思い出しました。伝えることです。この僕の体験を、まずは家族に話しました。友だちにも話したいと思います。小さなことかもしれないけれど、身近な人たちに伝えることから始めようと思いました。今年の夏休みの終戦の日は、僕にとって、今までで一番、平和を願う日になりました。

私は周りにいる友達や家族、大切な人が一瞬にしていなくなってしまう、ほんのちょっと前まであった楽しい暮らしが、辛い暮らしに変わってしまう戦争の悲惨さを広島派遣団に参加して、肌で感じ、学びました。

1日目、広島に着くと、色々な建物や人がたくさん歩いている姿から、ここに原爆が落ちたとはとても想像できませんでした。フェリーに乗り、世界文化遺産である宮島・厳島神社へ行きました。観光客も多く、ここでも戦争が起きたと想像することはできませんでした。

夕食を食べた後、私たちは「核兵器のない世界、恒久平和について、私たちができること」を考えました。「私たち」にできることを考えるのはとても難しく、どうすれば核兵器がなくなるのか、どうすれば恒久平和になるのか、そのためにできることは、と考えました。私たちがそれぞれ考えた意見を班で伝え合い、まとめました。私たちの班では「被爆者の方から聞いた話を色々な人に伝えていく」というまとめになりました。私たちは国や世界を動かすような力は持っていません。ですが、被爆者の方から聞いた核兵器の恐ろしさ、戦争の恐ろしさを誰かに伝えることはできます。少しでも多くの人に戦争のことをもっと知ってもらいたいと改めて思いました。

2日目、私たちは被爆体験講話を受講しました。その話はとても悲惨で聞いているだけでも胸が痛くなりました。道には顔が火傷でパンパンになって死んでいる兵隊、背中を大火傷した若い女性など、けがや命を落としてしまった人があちこちにいたそうです。疎開した小学生たちが帰ってきてても親が命を落としてしまっていることが多く、小さな子の前でも心をえぐるような現実が目の前にあったということ想像すると、戦争は本当に起こしてはならないことだと強く思いました。

原爆ドーム見学では、広島に着いてから感じてこなかった戦争の背景を一気に感じ、ここに本当に原爆が落とされたんだ、ここで本当に戦争が起きたんだ、と実感しました。

広島平和記念資料館では、原爆で命を落とした人たちの過酷な現実を知ることができました。ボロボロになった服や自転車などを見て、原爆の恐ろしさともつ強さを改めて感じました。けがをした方たちの写真も展示されており、とても胸が痛くなりました。今でもその写真を見返すと、胸が痛くなります。展示物の写真を撮ろうとすると、当たり前のように、カメラは命を落としてしまった方たちの顔を認識し、ピントを合わせました。私はそれを見て、この方たちは私たちと同じように生きていたんだと感じ、とても他人事には思えませんでした。

核兵器の危険性や広島の歩みという展示ゾーンに行くと、核兵器のこと平和のことについてたくさん語られていました。新戦略兵器削減条約の締結や、核兵器の禁止条約が世界で結ばれていることを知り、同じようなことを繰り返してはいけない、といった強い意志を感じました。また、広島が原爆被害の実相と世界恒久平和を訴え続けていることを知りいつか世界が平和になってほしいと感じました。

私は広島派遣を通して、平和とは何か、核兵器の在り方について私なりの考えを深めることができました。平和とは戦争という存在がこの世界からなくなり、当たり前のようなこの毎日の有難さを誰もが忘れず過ごしていくことだと考えました。核兵器の在り方については、そもそもない方が良いに決まっています。核兵器は人に作られても、心は持っていない、無差別に人を殺す危ないものはこの世に在ってはならないと学びました。また、戦争をなくすため、私にできることを少しでも多くやろうと強く思いました。

広島に行って学んだこと

北中学校 1年

私は広島派遣団に参加して、戦争や原爆の残こくさを学びました。

まず、私たちは、山本定男さんという14才のときに被爆された方に当時の話を聞きました。山本さんの話によると、原爆は、もともと、広島と長崎と決まっていたわけではなく、17の地域で投下目標が決められていたそうです。そして、原爆が広島に投下される4日前、広島と長崎をふくむ3つの地域にしぼられ、一番天候良かった広島に投下されました。それ以外にも、投下には直径3マイル(4.8km)のはん囲と決められていて、広島は、それに最適だったそうです。

原爆でぎせいになった人は、日本人だけではなく、朝鮮半島などからきた外国人もまきこまれたということも聞きました。他にも、山本さんからはたくさん聞きました。集団そかいなどで地方に行った子供たちが帰ってきたときに、原爆で親がいなくなってしまった子供たちがたくさんいたとか、爆心地から1.5kmも離れていても、半分以上の人がぎせいになってしまったとか、広島二中が一番ぎせい者を出した学校で、その1年生が爆心地から500mぐらいしか離れていなかったのもその1年生全員がぎせいになってしまったなどと、たくさん話を聞きました。その中でもしょうげきだったのが、山本さんの家族が全員無事だったということです。しかも山本さんのお父さんは、爆心地から近い建物の中にいたのに、生きて帰ってきたそうです。山本さんのお父さんがいた建物にいた人たちは、山本さんのお父さん以外全員ぎせいになってしまったそうです。キセキすぎてびっくりしました。山本さん自身も先生の「学校には行くな」という言葉で命びろいしたそうです。

山本さんの経験談としての話もたくさん聞きました。山本さんが被爆した状況としてまず、飛行機が地上から近い距離で飛んでいたそうです。空しゅうかなと思ったそうですが空しゅうは夜中にあるものだったそうで、そうさくしにきたのかなと思っていました。山本さんや、まわりの人たちはその飛行機が飛んでいるのを見上げていました。ずっと見上げていると、だんだんその飛行機が近付いてきたそうです。そしたら原爆が落とされて爆発をし、山本さんは、広島駅が巨大な火炎に包まれているのを見たそうです。山本さんはあまり大げがをしていなかったのに、同じ場所にいた2年生が大やけどをしていたそうです。同じ場所にいたのに不思議だなと思いました。

山本さんが家に帰ると、お母さんに親せきは生きてるか確認してきてと言われ、道を歩いていると、道ばたには骨になった人がいたり、やけどで体がパンパンになった兵たいさんがたおれていたそうです。山本さんが見たその状況を絵に書いてもらったそうです。それを見たら、すごくリアルで山本さんはこれをもっとリアルで見てしまったんだなと思いました。道を歩いていると、屋根がわらがとけているものがあったりもしたそうです。そして、山本さんの親せきも、2人以外は全めつしてしまっていたそうです。

山本さんが、全めつしてしまっていた1年生の状況を知ったのは、それから何十年かたったときでした。テレビでやっていた「碑」というドラマで初めて知ったそうです。1年生は、道ばたで亡くなっていたり、川の中で亡くなっていたり、必死になって家に帰ろうとしている人がいたそうです。そんな山本さんは、戦争がないということが一番平和だと言っていました。



私は今回の広島派遣団に参加し実際に行くまでは、戦争は良くないことで、ニュースで見るロシアとウクライナの戦争も早く終わってほしいし、大変だなと思っていました。でもそう思うのはほんの少力で、どこか他人事でした。

派遣団に選ばれてからも少し旅行気分で、原爆ドームや原子爆弾のことを調べていてもこれが落ちてきたら怖いなど思うことはありましたが、あまり考えずにいました。実際に着いた広島1日目も厳島神社の見学で本当に旅行気分で楽しんでいました。

でも2日目に原爆ドームを見学してみて、原子爆弾は本当に落ちて大勢の人が被害に遭ったんだなと改めて感じたし、調べているときにも画像で見たことがありましたが、実際に自分の目で見ると何とも言えない悲しさや苦しさがこみ上げてきました。

そして次に、実際に被爆者の山本定男さんに原爆時の話を聞きました。当時、山本さんたちの学校には1、2年生しかおらず、夏休みに入っても銃の確保のために働いていました。しかし原爆が投下される前日に、たまたま山本さんたち2年生は食料確保のため爆心地から離れた東練兵場に派遣され、生き残りしました。東練兵場にいるとき、B29機が3機飛んで来たが、空襲は明るい内ではなく夜の暗い内に来るので偵察だと思っていました。

しかし飛行機が広島を中心地に向かっていき、その後はすべてが一瞬にして壊れました。「ぐわー」という音と共に直径400m程の火炎がだんだん散っていくのが見え、山本さんは、すぐ近くにあった天満宮へ逃げ込みました。先に避難していた人に「家の中にいろ」と言われ待っていたが、いつもの空襲のように何度も爆弾が落ちる音もせず静かでした。少したってから外を見てみると、あたり一面真っ白で一部からだんだん炎が広がっていました。その後家に帰ってみると、爆風によりあたり一面ぐちゃぐちゃになっていました。しかし爆心地から遠かったため、家族は無事だったようです。しかし爆心地から近かった親戚の人は放射線の影響で亡くなってしまったそうです。また、上半身で道端に並べられていたり、あまりの熱と爆風で骨だけになっていたりした人も多数いたそうです。

山本さんの話を聞いた後、平和記念資料館で被爆者の遺品や、被爆の惨状を示す写真や資料を見ました。実際に見てみると当時の状況がよりリアルに想像することができ、胸が押しつぶされそうになりました。

広島派遣団から帰ってきて、自分の目で見たり、聞いたり、感じたりしたことを家族に話しました。今回のことを振り返りながら話していると、思い出すだけで涙が出てきて話をするのがつらくなりました。今までどこか他人事としてとらえていたけど、もし家族や友達、仲間を失ってしまったらと考えるだけで本当につらくなりました。でも、当時の話をしてくださった山本さんは、私の感じたものよりも想像以上につらく苦しく、言葉に表せられないほどのものだろうと思いました。なので、そんな原爆時のことを話してくださった山本さんに本当に感謝したいです。

私は今回の派遣を通して、以前よりも戦争や原爆による被害と、被爆者の方々の苦しさを知ることができました。これからの私の役割は、今回の派遣団での体験や経験を多くの仲間に伝え、戦争の恐ろしさや、原爆の悲惨さを知ってもらうことです。

また、みよし市の広島派遣団に1人でも多くの仲間が参加し、同じように多くのことを学んできてほしいです。

この広島派遣事業に応募したきっかけは、やはりロシアとウクライナの戦争が今なお続いていることが大きかったです。僕たちは実際の戦争を体験しておらず、人から聞いたことしかありません。それが、ロシアとウクライナ両国間の戦争は終わらず、その状況をテレビで見られるのです。今まさに行われている戦争を広島や長崎の方々はどう感じていらっしゃるのか。原爆ドームや広島原爆資料館を見学し、僕でさえ目をそむけたくなりました。まして人も建物もすべてを一瞬のうちに破壊し、生き延びることができたとしても、家族を失って一人になってしまったり、後遺症に悩まされたりと今もなお続く戦争の傷をもつみなさんは、戦争が早く終わればよいと、ただそう思われているのではないのでしょうか。

出発前になぜ原爆が広島に投下されるに至ったのかを知りたいと思っていました。被爆者体験の方からのお話の中で、新潟、広島、小倉、新潟、長崎、名古屋、横浜など17地点が投下候補地とされ、さらにその中から4地点に絞られ、最終的に天候が良かった広島に8月6日に投下すると命令が発せられたということを知りました。派遣から帰って、いくつかの文章を読むと、日本への原爆投下が、アメリカによる新兵器の威力の確認と莫大な費用を費やした原爆開発をアメリカ国内に正当化したかった、という自己中心的な考えだったと知り、憤りを感じました。

今回の広島派遣において戦争の悲惨な部分を目の当たりにし、気持ちが滅入ることが多かったですが、反面『恒久平和』を考える良いきっかけにもなりました。今僕たちがこうして不自由なく生きていれることに感謝しつつ、いかにこの平和を維持していくかを考える機会をいただいたと思います。国と国との大きな平和維持は僕たちにはまだ無理でも、家族、隣人、友人、地域、学校での平和を維持する為に、互いの理解、傾聴、認め合い、話し合いなどでお互いを尊重しあうことから始めたいと思います。

被爆体験者の方の話など、派遣に参加しなければ得ることができない貴重な体験をさせていただいたことに感謝いたします。ありがとうございました。



77年前の広島から学んだこと

南中学校 1年

僕は、8月3日、4日に広島派遣団に参加しました。広島に行くまでは「戦争」はニュースで報道されているロシアによるウクライナへの軍事しん攻にしか目が向いていませんでした。人生で初めて身近に戦争を知り、テレビを通じて戦争を実感しました。僕は、そのため広島に原ばくが落ちたことによって、あまりにも変わってしまった現状を見てきたいと思いました。そして、昔の戦争を知ることでウクライナの戦争を新たな観点を増やして考えてみたいと思いました。また、この時はこれっぽっちも広島でどれだけのぎせい者が出て、どれだけ今も苦しむ人がいるのか知りませんでした。

広島で実際に被ばくした人の話、そして平和記念資料館を通して、77年前の広島での苦しみが恐ろしいほど伝わってきました。実際に被ばくした山本さんの話はとても重みがありました。山本さんは、当時中学2年生の14歳でいも畑の草取り作業をしていた時に被ばくしたそうです。ばく心地から約2.5km離れた場所で同学年の友人と、先に強い光に包まれ、熱風によりふき飛ばされました。目が覚めた山本さんが見た光景は、今まで見たことのないような赤いけむりと体が燃え上がるような熱風、何より今まで何度も見てきた広島の変わりはてた姿に言葉が出なかったと言いました。ばく心地から約500m先にいた1年生は、一瞬の出来事で大半が亡くなりました。運良く生き残った人も目が見えなくなった人、全身に大やけどを負って皮ふがただれた人、肉が見えた人は水を求め、つめを折って血を吸ったり、川に飛びこんだことにより亡くなったりと耳をふさぎたくなるような話ばかりでした。平和記念資料館では、元々白色のセーラー服だったものが被ばくしていた時に着ていたことで血で真っ赤に染まりボロボロになったものが展示されていました。このような原形もとどめない状態の物が他にも十数点あり、広島で起きた苦しみと悲しみを物語っていました。

広島から帰ってきて、僕がみなさんに伝えたいことは、戦争は多くの物をうばうのに「武力」を使い、人と人同士が殺し合い、人が人によって深く傷つき合うということです。では、どうすればいいのでしょうか。それは人間にしか出来ないことで「話し合い」です。武力で解決するのではなく、話し合いで解決すればどちらもぎせい者を出さない結果を見い出すことができます。戦争は、話し合いが出来ない動物のすることであり、人間のすることではありません。戦争を起こすことは簡単ですが戦争をやめるにはエネルギーと多くの人の思いや願いが必要になってきます。広島から帰ってきて、人間にしか出来ない「人間らしさ」を使って戦う、それが恒久平和が求められている今、ウクライナをはじめとする戦争をしている国が広島のような姿にならないように今すぐ考え方を変えてほしいものだと思います。

私は今回の広島派遣で初めて広島に行きました。広島と聞くと、野球や食べ物が真っ先に頭に浮かび、戦争についてはぼんやりとしたイメージしか持っていませんでした。しかし、実際に広島で見聞きしたことは私の想像よりはるかに悲惨で、このことを多くの人に伝えたいと思いました。

広島へ出発する時、市役所でたくさんの人に見送っていただき、期待に応えられるよう戦争についてしっかり学びたいと思いました。

派遣1日目の夜、グループワークとして、世界の恒久平和と核兵器のない世界についてグループで考え、話し合いました。今までこんなに真剣に戦争や平和について考えたことがなかったので、意見を発表するのは思ったよりも難しかったです。このグループワークを通して、平和であることは簡単なようで実はとても難しく、世界のいろいろなところで戦争や紛争が起き、なかなか解決できずにいるのだなと思いました。

派遣2日目、被爆体験者の山本定男さんの講話を聴くために、平和祈念館を訪れました。原爆投下の日、たまたま建物疎開ではなく軍需工場での作業に切り替わったこと、同じ場所で被爆しても長袖を着ていたか半袖を着ていたかで火傷の程度が違い、その後の生死が分かれたことなど、山本さんが被爆した時の状況やその時の感情を事細かくお話してくださいました。もし私が山本さんと同じ状況になったら、怖くてただ呆然とするだけで、その場から一步も動くことができないのではないかと思います。

その後、平和記念資料館を見学しました。ロビーに、広島に原爆が投下された1945年8月6日からの経過日数と、最後に核実験が行われてからの経過日数が表示される地球平和監視時計が設置されていました。2段目に「0322日」と表示されていて、最後の核実験からまだ一年も経っていないことを知り、とても驚きました。世界のどこかで新たな核実験が行われるとこの数字はリセットされてしまうそうです。数字がリセットされることなくどんどん増えていってほしいと思いました。

中に進むと、被爆者やその家族の言葉が書かれたパネルや原爆投下後の様子を撮った写真、絵などがたくさん展示されていました。原爆投下直後の広島上空や火傷で顔もわからないぐらい包帯をグルグル巻きに巻かれた人、焼け焦げて真っ黒になった三輪車など、目を背けたくなるような写真や資料があり、原爆の恐ろしさ、悲惨さを感じ、泣きたいような気持ちになりました。そして、たった80年程前の出来事なのに、私たちは知らないことが多すぎる、この悲惨な出来事からもっと学ばなければならないと思いました。

今もウクライナを始め、世界のいろいろな場所で戦争や紛争が起こっていて、核兵器が使われる可能性はゼロではありません。核兵器を必要としない平和な世界を作るために、唯一の被爆国である日本に住む私たち一人一人が世界に向けて核兵器使用の悲惨さや残酷さを発信していくべきだと思います。一人一人の声は小さく、すぐにかき消されてしまうかもしれません。でも、多くの声が集まればそれは大きな力となり、日本から遠くの場所にも届くのではないのでしょうか。まずは今回の派遣で学んだことを家族や友達など身近な人たちに伝え、戦争の悲惨さ残酷さを知ってほしいです。そして、もう絶対に戦争はしない、平和を守るという思いを広げていきたいです。

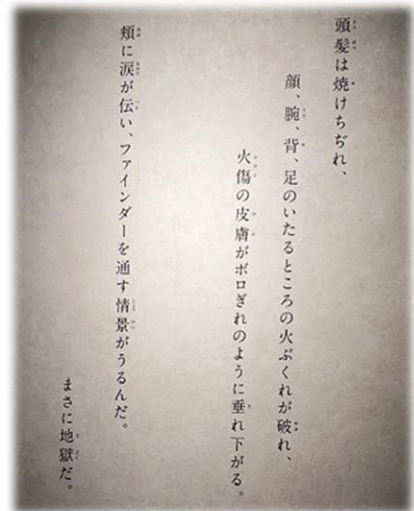


私は8月3日から8月4日の2日間で広島派遣団として広島に行きました。私が応募した理由は、社会の授業で学んだ戦争について、もっと詳しく知り、実際に見る・聞くという体験から平和について考えたいと思ったからです。

この派遣で考えさせられたことは2つあります。1つ目は戦争が社会や人々にもたらした悲しみを知り、日本そして世界中の人々が戦争を起こさないことについて理解を深めてほしいということです。派遣に行く前から「戦争はよくない、原爆は存在してはいけない」ということは知っていました。ですが、被爆体験講話を受講したり、原爆ドームや広島平和記念資料館の見学を通して、想像以上の状況であることを知り、とても衝撃を受けました。被爆講話では講師の山本さんが被爆時の広島市の状況について話してくださり、特に集団疎開で市外にいた子供たちが原爆で家も家族も失い生活できず子供の死体がいたるところにあったということが印象に残りました。いきなり家も家族も失ってしまったら私ならとても悲しいし、子供たちのこれからの未来をつぶしたことにとても怒りを感じました。原爆ドームは写真では見たことがありましたが、実物を見ると言葉がでなくなり、こんなことができてしまう物が世界にあるということに絶望しました。広島平和記念資料館を訪れて印象に残ったのはこの写真です。「まさに地獄だ。」この言葉からすごく悲惨な状況だったことがわかります。普通に暮らしていたら想像もできない、別世界のようだったのではないのでしょうか。

2つ目はこの悲惨な戦争を経験した人々が復興のために社会を発展させ、平和な世界にしていこうとする力強さを後世につなげたいということです。広島平和記念資料館に被爆直後の広島市の写真があり、建物や木などがほとんどなく瓦礫ばかり写っていました。しかし77年たった広島市はどうでしょうか。たくさんのビル、家、公共施設、植物など被爆直後では想像できないくらい復興をなしとげています。この復興には、人々の「悲しく、辛い出来事を繰り返してはならない。」という思いがあったからこそです。戦争を経験した方々の思いを次の世代が紡ぎ、「悲しみと強さ」を途切れさせないことこそ、私たちがすべき役割であると考えます。

私は原爆が落ちたことを悲しいだけで終わらせるのではなく戦争、原爆などがなく平和な世界にするために何ができるのか考え、それを誰かに話したりすることが大切だと思います。そして実際に被爆した方の話を聞いたり、戦争、原爆などについて調べたり、原爆が投下された広島、長崎に行ってみたりして戦争、平和についての理解を深めたり私たちが幸せに過ごせているのは過去のことがあったからこそということを知ってほしいです。



私は、広島派遣団に参加出来て良かったです。理由は、同じ団の人と普段話さない世界平和について意見を交換することができたからです。被爆者の体験談を聞くこともでき、このような貴重な体験に参加させていただきありがとうございました。

私がこの広島派遣を通して学んだことはいくつもあります。まず、被爆者体験談を聞いてです。

一つ目は、火傷や放射線の後遺症についてです。火傷にはケロイドがあって、症状はケロイドの部分が硬直、脱臼し、寒くなるとはげしく痛むということと、他には放射線によってなる白血病があります。私はこれを聞いて、原爆で生き残っても、生活は今までと同じようにはいかなくなり、地獄を見なければならぬというのは聞いているだけの私も、かなしく思いました。そして辛かっただろうかと、ひしひしと伝わってきました。

二つ目は、話を聞いていて今では信じられないほど、現在とはまるで違って一種の物語のように聞いていました。そしてこのように思える私は幸せなんだと実感しました。それと同時に戦争のことがとても怖く感じました。

次に、夕食の後の話し合いの時のことです。みんなで戦争について話し合いました。たくさん話し合って、色々な意見が出てきました。例えば、「核兵器をなくすには、材料のウランを他の事に使う」など、さまざまでした。でも、正解は分からなかったし結論も出ませんでした。いろいろな意見が聞けたのでそれもよかったのかと思ったり、正解が分からなくてもずっと考え続けたいなと思いました。

他にも、被爆者への質問の時のことです。一人が「自分の後遺症の心配などはありませんか?」と言った時、「心配です。ある医者に診てもらっているが不安」とかえってきて、とても不安だったのだなということが伝わってきました。原爆にあった人はみんなこんな不安を抱えているのだなと思い悲しくなりました。

体験談ではたくさんの方のことを教えてもらいました。例えば、中学校の生徒、一年生と二年生は、空き地を作る作業をしていたこと、火傷の部分には天ぷら油をぬっていたこと、一年生は爆心地に近かったので全滅してしまったこと、どれもとても悲しい話でもう聞きたくないと思うほどのことでした。私はこの話でいろいろなことを学びました。でもまだこの得た知識を活用することが出来ていません。なのでこの知識を活用出来るようにしたいと思いました。

今回の広島派遣で一番痛感したことは、平和がとても大切だということです。その大切な平和を維持するには、戦争はいけないということを意識し続けたいといけなことが分かりました。でも、意識するだけでは、なにも変わらないので、広島派遣で得た知識を今は使えなくてもどう使えばいいか、考え続けていきたいです。

平和学習広島派遣で学んだこと

三好丘中学校 2年

今、核保有国による他の国への侵攻が起きています。そして、もしかしたら核戦争が起きるかもしれないという不安が世界に広がっています。広島と長崎では、「人」が開発した核兵器によって、多くの「人」を傷つけ、悲しませました。僕はこのような悲劇を二度と起こさないために、自分の目で見たり当時の話を聴いたりして、同じ「人」として広島で起きた真実を知りたいと思いました。そして、たとえ小さくても僕たちにできることを考えたいと思い、平和学習広島派遣団に参加しました。

僕はこれまでも写真や映像などで原爆ドームを見たことがあります。しかし、実際に行ってみると感じるものが全く違いました。僕はアメリカに住んでいた小学生の頃、アメリカ軍の博物館に行ったことがあります。そこで、長崎に原爆を落とした実際のB-29を見ました。その機体から投下された一つの原子爆弾が、一度に多くの長崎の人の命を奪いました。今回、広島原爆ドームを目の前にして、自分が77年前の広島に立っていることを想像しました。そして、突然現れたB-29から原爆が落とされた瞬間の恐怖を感じました。僕と同じような年齢の人たちや、たくさんの人々が苦しんだと思うと、胸が痛くなりました。そして、被爆した広島の人々の悲しみを強く感じました。今回の広島派遣では、当時中学生だった山本定男さんから被爆体験のお話を聴くことができました。原爆が落とされた日は、交代での畑作業を行なうためにいつもとは違う場所に集合していて、たまたま爆心地から離れていたそうです。そのため、山本さんは一命を取りとめることができましたが、学校に残った多くの人は苦しんで亡くなったそうです。そして被爆後は、放射線という目に見えない未知のものへの恐怖や不安とも戦い続けることになったそうです。現代のコロナウィルスとも似たところがありますが、当時全く分からない放射線を浴びてしまったことに対する恐怖や不安は、とても大きなものだったと思います。原子爆弾による被害は、被爆直後だけではなく、長い年月にわたって人々を苦しませ続けるものだと知りました。

広島平和記念資料館では、被爆した直後の広島の写真や被爆者の遺品を見ました。その中には、僕と同じ年代の中学生の少年たちが着ていたボロボロの学生服がありました。背中部分は焼け焦げてなくなっていて、背中から原爆の熱線を浴びた様子を思い浮かべました。あまりに悲惨な様子から、自然と77年前の被爆地に自分が立っているように感じられました。残された遺品を見て、たくさんの人々の深い悲しみを感じました。どの人にもみんな名前があり、大切な人がいて、未来への希望を持った人たちだったと思います。そんな幸せが一瞬で消される核兵器の無情さに深い悲しみをもちました。そして、人々の幸せを奪い、人々を苦しめる核兵器や戦争は絶対になくさなければならないと強く感じました。



僕は、世界恒久平和を実現するための第一歩は、相手を知ろうとすること、理解しようと努力することだと思っています。相手の立場になって考えることで、物事の見え方が変わってくるかもしれません。グローバルな社会になっている今、様々な文化を理解する力や多様性を認める力が必要になっているのだと思います。僕は、いろいろな考え方を理解する努力を諦めないようにしたいと思います。

核兵器のない世界の実現をみんなが諦めないことが大事だと思います。広島で使われた核兵器は、「人」が開発して多くの「人」を傷つけました。核兵器のない世界を実現することができるのも、私たち「人」にしかできないことなのだと思います。

僕は、みよし市中学生平和学習広島派遣団として、二日間広島に滞在し、平和記念資料館や被爆者の方の元を訪れました。僕は、小学生の頃に、「はだしのゲン」という広島原爆を題材にした漫画を読んだことがありました。全十巻に及ぶ長編漫画ですが、本が苦手だった僕でも次々と読み進めていました。でもその時の僕は、想像しにくい話で、現実的に思えていませんでした。そのことに気付いたのは、当時中学二年生で被爆した山本正男さんの話を聞いたときでした。戦争が最優先で行われていたその時代は、小学生たちは学童疎開へ、中学生の男子は畑仕事や軍の訓練、女子は工場朝から晩まで戦争に使われる飛行機の部品などを作っていたといいます。そんな中、1945年8月6日、あの恐ろしい原子爆弾が広島に投下されました。半径2キロにわたる火災、屋根は溶けて潰れていました。全身の火傷と強い放射線により14万人もの人が一瞬で命を落とされたと言われていました。その日の出来事を、山本さんは昨日の事のように話してくれました。当時中学生だった山本さん達は、学校から少し離れたさつまいも畑で畑仕事をしていました。とても暑い日で、山本さんの隣にいた同級生は、上の服を脱いで作業していたといいます。その作業中に山本さん達は、あるものを目にしました。それは3機の敵軍の飛行機です。空襲は普通、夜に行われるものです。そして、もっと多くの飛行機が押し寄せてくることを知っていました。偵察に来たのだと思った山本さん達は、飛行機に向けてヤジを飛ばしました。その瞬間、約4000度の爆風が人々を襲い、ほとんどの人が吹き飛ばされました。山本さんは10秒ほど気を失っていたといいます。目を開き、飛び込んできた光景は酷いものでした。よく晴れていたはずの空は真っ黒い雲に覆われ、隣で服を脱いで作業していた同級生は、全身に酷い火傷を負っていました。しばらくすると、ぽつぽつと黒い雨が降ってきました。被爆し、酷い火傷を負った多くの人達は、水を求め、川に入り、死んでいきました。溶けた弁当箱や、焼けた学生服、皮膚や爪の写真などを見せながら、山本さんは恐ろしいほどリアルに話してくれました。「気持ち悪い」と、感じました。人が人を殺すために恐ろしい爆弾を作り出し、人が人を殺すためにその爆弾を投下したということが、「気持ち悪い」と、そう思いました。



今、この地球上で起こっている戦争の中で、特に注目を集めているのは、ロシアによるウクライナ軍事侵攻です。テレビをつければ、毎日のように報道されています。多くの人たちが家を失い、家族を失い、苦しい思いをしています。なぜ、戦争は繰り返されるのでしょうか。なぜ、核兵器は無くならないのでしょうか。なぜ、人と人は争い、殺し合うのでしょうか。僕なりに出した答えはこうです。『戦争が何を引き起こし、どんな惨状をもたらすのか、きちんと理解していない人が多いから。』日本は世界で唯一の被爆国です。広島と長崎に二度も原子爆弾を落とされています。そんな日本だからこそ、世界に発信するべきことがあると思います。核兵器が何を奪っていったのか。人の命だけでなく、多くの人々の人生、家族、安心を、たった一つの爆弾が全て壊していきました。日本人の僕だから、広島で学んだ僕だから、これから発信していきます。核は全てを奪い去る恐ろしいものです。人間が人間に向けてはいけぬ、悍ましいものです。皆さん、こんな戦争、こんな核兵器、「気持ち悪い」と、そう思いませんか？



令和4（2022）年度みよし中学生平和学習広島派遣団